

REVIEW ESSAY

鈴木洋仁, 2014

『「平成」論』

青弓社



「饒舌の社会学」にいま、なにが可能であるのか？

——書評『「平成」論』——

片上 平二郎

1 いくつかの風景から

よく考えてみれば「書評論文」とは不思議な言葉である。論理性や学術性が重んじられる「論文」という言葉と、長めの「評論」とは異なり書物を紹介し所感を述べるといったことを行うための軽い文章であることが多い「書評」という言葉が並列されたこの「書評論文」なるジャンルは、いささかとらえがたい、どこか、鶴のようなものとしてあるのではないだろうか。だが、修士論文を素材としながらも、それとは別の1冊の読み物として「それをもとにほとんど書き下ろ」（鈴木 2014a: 12）された書『「平成」論』を論じるには、むしろ、この「書評論文」という形式がふさわしいものであるような気がする。「学術論文」を下地にしながらも、この本は、いわゆる「論文」にはおさまりきれない何かを為そうともしている。『「平成」論』のこのような「学術論文」との微妙な関係性をおさえるには、この「書評論文」という不思議

な性格を持った形式は適しているのではないだろうか。

この文章の左上には「REVIEW ESSAY」という文字が掲げられているが、まずはその言葉に寄り添い、エッセイのようなかたちで身近な話をしながら、この本に話をつなげていきたいと思う。

ふと気が付いたことだが、この文章を書きはじめた今日は「戦後70年」にあたる年の「終戦記念日」である。しめきりギリギリに執筆をはじめるという悪癖ゆえのたまたまの偶然ではあるが、「元号」「年号」をめぐる徹底した思索を繰り広げる『「平成」論』というこの本の書評をこのようなかたちではじめることには奇妙な感じをおぼえる。

鈴木はこの本の中で「平成」という「元号」の不思議なまでの存在感の薄さについて述べている。いま、この文章を書いている横で、テレビから今年が「戦後70年」であるということ

がくりかえし伝えられている。だが、そんな「戦後70年」という今年が、「平成何年」であるか、ずっと出てきはしない。それは「70年」という数字のきりの良さから来るものかもしれないが、「平成20年」や「平成25年」がどのように扱われていたかを考えてみれば、やはり「平成」というものの存在の薄さは実感される。

「戦後」という時代区分の不思議なまでの存在感の前で、「平成」という時代の存在感はかなり薄いものとしてある¹。本書にも「日本語における『戦後』という線分はあまりにも長すぎる。融通無碍な概念として、いつまでも延命している」(鈴木 2014a: 34)とあるが、まさにその「終わりが無い」「戦後」(鈴木 2014a: 32)という時間を強く意識させられるタイミングで、この書評は書かれようとしている。もはや、あれだけ“長かった”と語られていた「昭和」の64年間すら超えて、いまだ語られ続ける「戦後」という時間の奇妙さを感じざるを得ない。

この書評を書こうと思ったきっかけは次のようなことだ。批評家である佐々木敦と東浩紀によって企画された「批評再生塾」というスクールがある。ここでは、講師によって課題が提示され、それに基づき受講生たちが批評を執筆し、インターネット上にアップするというシステムになっているのだが、この本との関連で気になったことがあった。この課題の1つに東浩紀による次のような出題文があった。

昭和90年代、というのが今年度の批評再生塾全体を貫くテーマである。なぜ昭和で数えるかといえば、元号こそ平成に変わって27年というものの、ぼくたちはまだ昭和の引力のなかで生きてるように思われるからだ。戦後70年のいま、戦後レジームの克服がいまだ政策課題になり続けていることが、

いかにぼくたちが深く昭和に囚われ続けているかを証明している。……

というわけで、第1回の課題として、ぼくが提示するのはつぎのようなものである。書籍、映画、マンガ、音楽、社会現象、なんでもよいので、きみたちが「これは昭和の延長線上にはない」と思う現代の事象をひとつ取り上げ、その作品評あるいは現象分析をコンパクトに行い、ぼくのような懐疑的な読者を「ポスト昭和」の想像力に誘うような、説得力のある原稿を仕上げてください。²

ここでもまた「平成」の存在感はとても希薄なものとして語られ、またそれ以前の時代である「昭和」の存在感が強く語られる。「戦後」と同じように「昭和」という時代も不可思議なかたちでその存在感が延命され続けている。「昭和」は終わったはずだ。にもかかわらず、それはまだ存在しているかのように感じられてしまう。ここで東が期待しているのは、そのような感覚を打ち砕くような「革命性」を帯びた「ポスト昭和」⇔「平成」のイメージが提示されることだ。上記のサイトの中で、課題として提出された批評文を確認することができるが、やはり、それらの中でも“長き”「昭和」を打ち砕くような“強い”新たな時代イメージを見ることはできない。どちらかといえば、「サブカルチャー世界」における「90年代」や「ゼロ年代」といった時代意識に対する短期スパンの変化が論じられるものが多く、これらの課題文は、むしろ、東の問題意識を補強しているようなかたちで存在しているように思われた。

ただし、自分が語りたい問題はそこにあるわけではない。わたしはこの課題を見たときに真っ先に「社会学者」鈴木洋仁による本書、『「平成」論』の議論を思い出したし、同様のことを

思いつきこの本に依拠したかたちで論考がいくつかはあらわれるだろうと予想していた。『「平成」論』はまさにこの課題で問われているような問題を「社会学」的な手付きで扱っている本であるし、この本は「批評」というジャンルにも近接したものである。現に鈴木は「本書もまたその末端に位置する『批評』と呼ばれる営み」（鈴木 2014a: 172）と語っており、自著と「批評」の関係を強く意識している。だが、そのような自分の予想は外れ、ここで発表された批評文の中でこの本を参照する文章はまったく存在していなかった。

このような外れた予想をわたしがした理由は「社会学」という学問が持つ「批評」に与える影響力の存在を前提にしていたからであるように思う。「社会学の時代」というものがあつたとよく語られる。そして、その「社会学の時代」の中で、「社会学」はその枠組みを踏み越え、他の学問分野や文化批評にまで影響を与えられるようになったと語られていた。だから、「昭和」／「平成」という問題系において「社会学」がもたらす答えは「批評」にも応用されるだろうと考えていた。だが、実際のところ、先の課題の中で「批評」が提起する問題にもっとも近接したであろう「社会学書」は賛同も反論もなきままに、この文脈の中では、存在を意識されないものとなっていた。もはや、「社会学」は「批評」からなにかを期待されるものにはなっていないのかもしれない、そんなことを考えた。

『「平成」論』という書物の位置付けが気になりだしたのはこのような経緯からだ。自分は、そのタイトルや大型書店における配置のされ方、もしくは書店イベントの組まれ方などから、この本を「社会学」ジャンルにおいて久々に登場した「キャッチーな本」であると考えていたこともある。だが、どうも自分のその感覚

はずれていたらしい。先の参照されなさに見られるように、この本は、むしろ、「スルーされた本」であると言えるだろう。おそらく、売り上げを見れば売れた本であるし、読まれた本でもあるはずだ。だが、それでも、その反応を見れば、やはり「スルーされた」感触の方が強く感じられることだろう。

読んでみればわかるように、たしかにこの本はかなり“特異な”本としてある。そして、きわめて“語りづらい”本だ。『「平成」論』という本のスルーのされ方を見たときに、この本の“特異さ”とははたしてどのようなものであるのか、改めて考えてみたくなつたのだ。それがこの書評を書こうと考えたきっかけである。

この問いは同時に、「社会学の時代」として語られる感覚は実際にはどのようなものであつたのか、そして、そこにおいて語られていた「社会学」とはどのようなイメージのもとにあるものであつたのかという問いともつながりうるものであろう。「社会学」はどのようなものとして、他の諸学や批評の世界から欲されていたのか、そして、現在、そのような「社会学」へのまなざしはどのように変化しているのか。それを考える素材として、この『「平成」論』という書物を考えることはいくつかの視座を提供してくれるはずだ。この本は、「社会学の時代」、そして、『いま』の社会学の意味を考え、それらとの関係の中で自覚的に新たな「社会学の楽しさ」を追求しようとした（鈴木 2014a: 12-13）ものとしてあるが、そこでどのようなことが行われようとしていて、それがどのような帰結をもたらしたのか、を問うてみることは、「社会学」の「いま」を考えるための恰好の材料を提供してくれることだろう。そもそも、鈴木は前年度のこの『書評ソシオロギス』掲載の「そのテキストの読者は誰か？ ——書評『社会学

ワンダーランド』において、この「社会学の時代」という問題を問うていた。ここにも鈴木が、いま、「社会学」になにができるのか、そして、なにをすべきかという問いを強く意識していることが確認できるだろう。その意味では、この書評は前年度の鈴木の本の問題意識を引き継ぎながら、書かれるものでもあるはずだ。

もう1つ印象に残った自分の経験について書いておきたい。今年度、担当していた社会学科のゼミ・テキストとして見田宗介の論文「夢の時代と虚構の時代——現代日本の感覚の歴史」を使用した時の学生の反応だ。「理想の時代」「夢の時代」「虚構の時代」と「現実」の対立語の変遷からその時代意識を読み取っていくこの論文は、その「歴史」に対する視点からまさに「社会学的思考」の典型例であろうと考え、テキストとして選択したのであるが、学生からの反応は「なぜ、社会学のテキストとして『過去の歴史』の話を読むことになるのか、よく理解できない」というものであった。別に彼らが「社会学」という学問を苦手とするわけではない。どちらかというところ、こんなに真面目に、かつ楽しそうに「社会学」の文章を学生は読むものなのかとうれしく感じているゼミであった。特にその感触は「当事者研究」と「若者論」を読んだ際に強く感じたものであるが、そんな彼らも、「歴史」を対象とした際に一気にその「社会学」的意味を見失ってしまう、これは興味深いことであった。そして、そろそろ、学生との関係の中で「社会学」という学問のこれまでの営みとこれからのモードの如きものについて考えてみる必要があるかもしれないなと思ったりもした。

ただ、これも考えてみればわかることもある。見田の「理想／夢／虚構」という時代図

式はそれが構想された当初、ほぼ15年周期という枠組に（偶然にも）おさまっていた（見田2006: 71）。だが、「現在」をこの図式の中で考えようとする、その最後に位置する「虚構の時代」の感覚は奇妙なまでに延長されて存在している。大澤真幸が『虚構の時代の果て』と平成8年＝1996年に宣言し、また、その後、次のモードを探し求めるために「動物化」や「不可能性」などさまざまな言葉が提起されているにもかかわらず、やはり、「虚構の時代」の延長の中に自らを置くという感覚が人々の中に強く存在しているように感じられる。ここにもまた、1つ前に存在していた社会のモードが延々と延長されながら、「いま」を覆っているという感触が存在している。

思いつきのように、自分がここ最近感じた「現在」というものを「社会学」的にとらえることのむずかしさについてのエピソードを書き連ねてきた。これはこの書評を書こうと思ったときに自分の中にふと思い出されたいくつかの出来事であるが、この感触は少なからぬ人々、特に社会学者には共有可能なものであることだろう。「現在」をうまくつかめない。だが、そのつかめなさの中にこそ、他ならぬ「現在」を感じてしまう。

このような感触をまさに論じようとしている本が鈴木洋仁の『平成論』であり、そのような意味で、俗な言い方をすれば、“ド直球”のこの本は学術世間に“ウケる”本であったはずだ。にもかかわらず、この本はやはり“不思議なスルー”のされ方をしているように感じる。いや、“不思議な”と書いたが、実際のところ、この本を読んだ自分の中ではむしろ、この“スルー”について“さもありません”と感ずるところもある。そのような感触から、この書評ではこの本の“特異性”を語っていこう

と思う。

2 限りなく「奇書」に近い書物としての『平成』論

まず、この本の“奇妙さ”をあぶり出すために、本書で語られていることを「要約」してみよう。そして、同時にその「要約」からこぼれ落ちる部分がどのようなものであるのかを確認してみよう。

この本の中で鈴木が「現代社会論」として主張しようとすることを要約すれば、それはほぼ各章の冒頭で繰り返されているように、「とても単純なこと」(鈴木 2014a: 49)になるはずだ³。「平成」においては、経済を語る言葉は「平成不況」「バブル崩壊後」「失われた十年」と像を結ばず(第1章)、「平成史」という呼び方が定着しないようにその名の下では歴史が認識できず(第2章)、「平成文学」というカテゴリーも成立しない(第3章)。ニュースは「べき」論で覆い尽くされつまらなくなり(第4章)、批評は「レビュー」と化す(第5章)。このように「平成」という時代はさまざまな領域において明確に像を結ばない。

この本では、文章がはじまって3ページ目ではやくもあっけなく結論めいたものが明かされてしまう。『平成』とはいったい何なのかわからないということが「結論づけ」られるものとしてあり、そして、「それこそが『平成』の特徴なのだ、……執拗に述べ」られることになる(鈴木 2014a: 11)。裏表紙にも大体、このような紹介が書かれているし、また本文中で幾度かこの手の要約は繰り返されることになるが、もし「要約をした」とすれば、本書は、大体このような内容となる。たしかに「とても単純」なことが述べられている。

このような「平成」に関する主張は「とても単純なこと」として処理されているが、それ自体、とてもユニークなものであり、1つの発見と言ってよい。ただ、この本の最大の特徴はおそらくこのような場所にはない。先の引用中にも「執拗に述べる」(鈴木 2014a: 11)とあったように、著者は自身で各パートで早め早めに「単純である」と自分で記した内容の「要約」を述べた後に、それを素材として饒舌に「ことばを連ねること」(鈴木 2014a: 216)をし続ける。「いちいち言い訳をしなければ前に進めない面倒くささ」(鈴木 2014a: 120)も「寄り道とつまずき」(鈴木 2014a: 215)もおそれることなく、「ペラペラと口を動かし」(鈴木 2014a: 235)続けている。この本の著者は、自身が分析した内容よりも、それを素材として言葉を積み重ねていくことの方にはるかに強い興味を持っている。

この「饒舌さ」という“特異性”こそがこの本の中核にあるものであるだろう。自身が行った「分析」や「内容」、「結論」などにはそこまで深い興味を示さないままに、言葉だけが黙々と、いや「ペラペラと」紡がれていくことが行われている。この感触は少なくとも「社会学」という領域において他ではあまり感じることはないものだ。その点において、この『平成』論という書物は「社会学書」としては「奇書」に近い。

この点については十分に鈴木も自覚的であるはずだ。鈴木はこの本の「社会学的意義」を以下のようにまとめている。

本書の意義は、この問いを見つけたことであり、「平成」という現在進行形の元号をめぐっても、これだけの話を展開できるさまを見せる点にある。「平成」が「ない」ことを頑強に主張するつもりなど全くなく、思考そ

れ自体の面白さを問う点にこそ、本書の独自性がある。(鈴木 2014a: 209)

本書はそのタイトルから人々の「自明性」を疑い、いまだ気付かれていない現代社会の側面を暴きたてるような「常識破壊ゲーム」的な「現代社会論」として人々をひきつけるものであるかもしれない。先の「要約」の内容もそのような側面を帯びたものとして読むことができる。「人々が「自明」のものとして扱っている「平成」なるイメージは実はその内実を持たない」、そのようなことを示したものとして読まれるものであるかもしれない。だが、鈴木はそのような読み手に期待される内容に対して、それを最初にあっさり語り、「単純なこと」であると片付けてしまっている。それは別に「頑強に主張」する必要があるものではない。そして、その後、それを素材として「べらべらと口を動かす」(鈴木 2014a: 235)す。むしろ、そちらの方が主目的だ。鈴木は「饒舌」というスタイルを、「社会学」書を書くにあたって選択した。

鈴木は読者の「わかりたい」という欲望に対して、距離をとろうとしている。「本書が目指すのは何かが『わかった』という爽快感よりも、むしろ、どこまで考えても『わからない』がゆえの堂々めぐりの快楽にほからない」(鈴木 2014a: 13)のだ。たしかにこの書物は「先行者たちにならって、『現代』を切れ味鋭く説き明かしているのかもしれないが」(鈴木 2014a: 13)、そんなことはどうでもよく、むしろ、そのことは「社会学者」がはまってしまう1つの罠であるかの如く、扱われてすらいらぬだろう。

「わかる」という爽快感を捨て、「わからなさ」の堂々巡りの中に入りこんでいくこの書物は、「現代社会を理解する」ということそれ自体よりも、「社会学」という手段を通じた1つの思考実践としての要素がとても強いものとしてあ

る。「わかる」ことよりもはるかに多くの快楽を伴ったものとして「わからない」ことはあり、その只中で考え続けてみることを、いくつかの場所で、鈴木はこの本でしていることを「実験」(鈴木 2014a: 14)と呼んでいる。

これはとても“奇怪な”試みであるように思うし、“そりゃウケるわけがない”ような本であるようにも感じられる。だが、これこそが本書で鈴木が行うべきであると考えたことであるし、世に問うべきであると考えたことであるのだ。この本を評するということは、そのことこそをとらえ、また、自分との関係の中でそのことを考えていかねばならない。

この書評では、鈴木が何故このような“特異な”スタイルをとっているのか、そのことを、現在の日本の社会学の状況の中に置くことで考えてみたい。そこで考えてみたいことは、本書が「何を明らかにしているのか」ということでなく、本書が「何をしようとしているのか」、「何を試みようとしているのか」についてである。その点において、この書評は、本書の「現代社会分析」としての達成度について問うということに前面には置いていない。どちらかといえば社会学的な「叙述実践」の側面を強調して読み取っていくことになるだろう。だが、その「叙述実践」の意味を考えるということは、この本の「現代社会分析」的側面をとらえなおすきっかけになるものでもあるだろう。

その意味で、この書評は、あくまで、現在、「社会学」に何ができるのかという問いに対する現在の状況の中での“極端で”“特異な”答え方の1例としてこの書を位置付けることに対する興味をもっとも強く持っていると言える。はたして「饒舌の社会学」とはなにをするものであるのだろうか⁴、そのことを考えてみたい。

3 「それでも、いま、社会学になにができるのか？」という問い

本書は「平成」を語るに際し「フラットということばを繰り返し使って」いるが、それは「遠藤知己が編んだ『フラット・カルチャー』を参照して」いるとされる(鈴木 2014a: 206)。「フラット」とは「いろいろなものが雑多に並ぶありさま」を指しているが、同時に「風呂敷をめいっぱい広げたとしても『全体がどこまでなのかは、わからない』ことだけはわかるとしか言えない」ということも意味されている(鈴木 2014a: 206-207)。そのような「フラット」な「社会像」の下で、鈴木が行おうとしていることは、「『平成』の無主ぶり、空洞ぶり、手応えのなさ、時代記述の不成立——そういった感覚を、そのただなかに身を置きながら、少しずつことばにしてみ」(鈴木 2014a: 20) するという試みだ。それは「高見から見下ろす特権的な書き方ではなく」、「凡庸さに身悶えしながら」行われるようなものでもある(鈴木 2014a: 20)。

鈴木はこの本において、遠藤の『フラット・カルチャー』論の構図を受け継ぎながら、それを自分なりの方法論として加工して使用している。このような「フラット」論の枠組を鈴木はなぜ、そして、どのように受け継ごうとしているのだろうか。それについて、近年の「社会学」の学問的状况とともに考えてみたい。

先にも述べたことだが、平成10年代以降⇨1990年代後半以降の学術世界が「社会学の時代」であったとはよく言われることだ⁵。「社会学帝国主义」とも称される(ある種、揶揄を含んだ表現であるとも思われるが)「社会学」の側からすれば過大な期待とすら言えるような視線が、日本の学問状況の中で「社会学」に向けられるようになった。たとえば、新し目の中型



書店に行ってみよう。その「思想・哲学」というコーナーには「日本思想・社会学・西洋思想」という3つのカテゴリーが存在している。「社会学」という学問は「社会科学」の下位ジャンルというよりも、それ自体が1つの「思想」として流通しているところがある。これは「思想」への“格上げ”と言うこともできるだろうし、脱科学化の流れとして批判的にとらえることもできるだろう。

ここには「思想」なるものの内実の変化を見ることができよう。「真理」という不動点を提供する「哲学」が基礎的な世界観を提供していた人文知の世界は徐々に、不動の「真理」ではなく、むしろ、ある視点を生み出す「文脈」に基づいた過程性の方に興味を持つようになる。「相対化」という視点が人文知の世界において大きな意味を持つようになる中で、「文脈」とともに諸事象をとらえようとする「社会学」的な方法論への期待が高まるようになってきた。

学術世界全体の動向の変容と同時並行的に、「社会学」の側にも内的な変化は生じていた。まさにこの「ソシオロギス」という場所に先駆的にあらわれたような「現代思想」や「ポスト

モダン思想」の影響を受けた社会学は、それまでの実直な学術的性格を薄めながら、“おもしろさ”という側面を強めていくことになる。平成5年＝1993年に出版された別冊宝島の『わかりたいあなたのための社会学・入門』の副題が「常識破壊ゲームとしての社会学」であったことにもこのことは見ることができるだろう。「社会学」は「社会」の堅牢と思われていた「常識」や「自明性」を「ゲーム」の如く、軽やかに「破壊」してみせるという自己イメージを表明するようになる。単にアカデミックな世界に自閉した知としてではなく、「社会」なるものより強く密接した存在として「社会学」はその意識を変えていくようになった。「社会学になにができるか」、このような問いに駆動され、「社会学」はその領土を広げようとしていった。「制度化」された「学術論文」のルーティン・ワークの中では問えない領域にまで「社会学」は自身を拡張しようとした。

「社会学」なるものにもたらされた外部からの要望と、「社会学」内部における外部への欲求は、平成7年＝1995年のオウム事件を強い契機として「社会学ブーム」というかたちで結実にするに至る。人々の好奇心に答えるようなかたちで「社会学」はその「社会的位置」を得るようになる。どこかでいまだ思想的高踏性(フランス思想からの輸入というような)を帯びていた「現代思想」に対して、より軽やかな時代的な「知」として「社会学」は求められるようになった。芸術や文学などの高踏文化を主軸に語る「現代思想」に対して、ポピュラーカルチャーを語るができる「社会学」、そのようなイメージもまたこれと関係していたことであるだろう。幾人かの「スター社会学者」の活躍とともに「社会学」は“ポピュラーな”学問へと変化していくことになる。

だが、これは「社会学」にとって素朴にしあわせなことであったと言うことはできない。このような状況は、鈴木が別の原稿で佐藤俊樹の論を受けて言うように「世の中のいろいろな事態をお気軽に、すぐに、斬新に、単純に、解説するツールとしての『社会学』の需要が高まった(鈴木2014b:4)状況の誕生であるとも言える。その中で「社会学」ならざるものも、「社会学」という言葉でコーティングされていくようになる。「社会学」と書名にありながら「社会学者」の目から見れば「社会学」ならざる書物は大量に出ているし、先の書店の「社会学」コーナーにも「社会評論的なエッセイ」とでも言うべき本が多数並べられている。だが、当の「社会学者」自身も、自らがやっていることと、それら「社会学風」書き物の間に厳密な違いを見出すこともむずかしい。「社会学」なるものはゆるやかに自らならざるものと結びついてしまっている。これが「社会学の時代」と呼ばれる状況の中で起きたことであると言えるだろう。「社会」を「相対化」して語る知は、「社会」なるものを“軽く”扱うことを可能にし、安易に「社会」というとらえがたいものを語ることを許容可能なものにしてしまう。

「社会学の時代」の中で、もともと「社会」なる概念を繊細に考えていたはずの「社会学」は、いつのまにか言葉が一人歩きし、「社会」なる全能的な概念を安易に用いて人々に“わかったつもり”になってもらう装置と化してしまったような部分もある。その原理上、万物に「社会的契機」を見出し、それをダシにして、あらゆる場所に参入していくことが可能な「社会学」は、どこにでも出没可能な知としてあり、万事を軽やかに説明して(いるかのように)みせることもできる。この夜郎自大的とも言える空虚な「社会学」の身振りは、先にも述べたよ

うな外部からの要請と内部からの欲望の双方によって駆動される運動としてあった。「反省性」という契機をすり減らし、「社会」という言葉を安易に用いた「過剰説明」（佐藤 2010: 397）でパフォーマンス的に自身の「存在証明」を行っていく、このように戯画化したかたちで「社会学の時代」の「社会学」の姿を語ることも可能だろう。そのような状況下では、「社会学になにができるか」などという、その拡張に向けたような問いは不要なものとなる。そんな問題に悩まずとも「できること」は目の前に多数、転がっている。そのような流れ作業的な変質の中では「社会学」の“おもしろさ”なるものもまた摩耗してしまったとすることができるだろう。「制度」のルーティン・ワークからの脱却は結局、また、別のルーティンを呼び起こしてしまう。

そして、同時に、他の学問の側もまた「社会学」的視点を取り入れ、「社会学化」するようになってくる。たとえば、「文学研究」や「芸術批評」においては、カルチュラル・スタディーズの導入に顕著なように社会的「文脈」は以前よりも強く重視されるようになってきている。そのような他分野の変化の結果、拡張によって「存在証明」を得てきた「社会学」は、その拡張によって逆に自身の「存在証明」をあやうくもしはじめる。だから、むしろ、新たに問題となるのは「社会学はなにをしているのか」という問いであるだろうし、さらに現在のモードで言えば、「社会学とはなんだったのか」という過去形による問い返しの場所にあるとすら言えるのかもしれない。

鈴木の「社会学」に対する現状認識もまた同じようなところにあるだろう。「学知の世界にとどまらず、世の中もまた、社会学化とでも言うべき傾向を強めているのであり、社会学は、

『脱常識』を謳う場所や、切り返しで得意になっている地点には、もう安住してられない」（鈴木 2014b: 12）。そこでは、肥大化した「社会学」とは別の道が探られるべきものとしてあり、そのような「社会学」が押し潰してしまった問題を再度、拾い集める必要がある。そこから、「社会学」という学問の“おもしろさ”も再構築されなければならない。そこで選ばれたのが「フラット」という視点だ。

そもそも、「1980年代以降、とりわけ1990年代半ばあたりから、日本社会にある興味深い文化変容が生じている」と遠藤は述べている（遠藤 2010: 8）。「単一的な価値規範の想定や特定のイデオロギーを背景とした『べき』論は背景に退き、「社会の営みを社会の外から俯瞰して語るという知識人的ふるまいの説得力も、これらとともに大いに低下し」（遠藤 2010: 9）、「諸領域を平板にサーフィンできてしまうことが発生させる、横並びをあてにしたある種の感覚が成立するようになる」（遠藤 2010: 10）。そこでは「局域の『すべて』は名指せない」。だから、「平板さを支える何らかの秩序があると先取的に前提としないで、現象をいわば自覚的にフラットに論じるとき、俯瞰視点の取れなさというリアルにかえって近接することができる」（遠藤 2010: 11）。

だが、「フラット」な状況下ではその視界の不明瞭さから、むしろ“わかりやすい”俯瞰的な状況説明が欲されるようになるとも言える。「社会学の時代」の「社会学」とは、このような「フラット」な状況下でそのような状況認識を放棄し、社会の側の要請に応えるというかたちで自らの「存在証明」を果たしていったと言えるだろう。佐藤が言うところの安易な「社会」概念による「過剰説明」はこのようにして生じてきた。だが、それは「学」としての「社会学」

というこれまでの「存在証明」を捨て去ることも意味していた。

だから、「全域」としての「社会」概念を安直に用いて事象を説明するのではなく⁶、「むしろ、局所の具体性に即して、その領域を1つのまとまりとして構成している論理を取り出し、この論理が関係する諸領域のそれといかにして関連しているかを考える」（遠藤 2010: 413）ことが目指されることになる。このような問題設定に従い『フラット・カルチャー』という書物は「そうした方法論的な感覚をゆるやかに共有しつつ、ある程度以上の数の観察拠点を取」（遠藤 2010: 11）ること、つまり、複数著者によって複数項目が記述されることを通じて、「局域が浅く共存する現代のアクチュアリティを浮かび上がらせ」（遠藤 2010: 414）ようとする試みとしてあった。これは「社会学の時代」に安直に要請されたのとは別のかたちで「社会学」的思惟を組み直すことを意味しているだろう。

鈴木もまたこのような遠藤の「社会学」に対する問題意識を引き継ぎながら『「平成」論』を書いている。だが、この書評で強調したいことはこの連続関係ではなく、その“特異な”継承の仕方である。後継者とは、時にラディカルな継承者となる。ある教えを受けた者は、その教えを愚直に、だが、いくつかの側面を特殊に増幅させたかたちで受け継ぐことがある。「原理」を引き継ぐ者は歪みにも似た“特異さ”を身につけることがある。本論では、鈴木によるこの継承の“特異さ”を拾い集めていきたいと思う。

『フラット・カルチャー』において、「複数視点」の「フラットさ」は複数著者による執筆というかたちで表現されていた。だが、鈴木はこれを単独で行おうとする。「年号」とはある社会空間「全域」の時間意識を支配するものとし

てあるはずだ。だが、にもかかわらず、「平成」という「年号」はそのような前提を持っているにもかかわらず、その存在感の薄さや他の時間意識との並列関係の中であくまで「局域」にとどまるものとしてある。それは「局域」的な「全域」という不可思議なものとしてあることだろう。そして、鈴木はその不思議な時間意識を考察するために、「経済」、「歴史」、「文学」、「ニュース」、「批評」といった領域を扱おうとする。これらの分析対象もまた、ある1つの領野として社会空間を覆う「全域性」が高いものとして存在しているが、同時に、それはあくまでも1つの観点として「局域」にとどまる。鈴木はこのような「局域」的な「全域」とでも言うべきものを個人で横断しながら、「ひとりフラット・カルチャー論」を展開しようとする。

そのような試みのため、鈴木には自身の言葉で複数極域を行き来しながら論を展開する必要が生じてくる。それを可能にすべく「饒舌」という方法論を鈴木は採用する。フラットな「局域」を一人で横断すべく、節操をあえてなくすようなかたちで鈴木は語り続ける。このような「フラット・カルチャー論」の強い背負い方は、鈴木の議論に独特の負荷をかけ、その議論にある種の凝縮を引き起こすことだろう。この凝縮の過程で『フラット・カルチャー』論の「楽しさ」は「快楽」（鈴木 2014a: 13）へと、「困難」は「身悶え」（鈴木 2014a: 14）へと、増幅的に変換されることとなる。「饒舌」の「身悶えと快楽」を中核に据えた「社会学」、これはかなり“奇妙な”「社会学」の姿ではないのだろうか。

だが、鈴木は「社会学がいまできること」としてこれを提示する。「現代の空気を掬い上げてキレイに問題点を整理して現実的に有効な処方箋を提出するのは、他の社会科学に任せておけばいい」、「本書はことばや思考の楽しさを追

い求めている」（鈴木 2014a: 13）。そして、これは繰り返し、「実験」と呼ばれる。言ってみればこの“奇妙さ”とは、「社会学」における「実験」なのである。

それでも、「社会学」になにができるのか？、この問いを探し求めるための「実験」としてこの書物はある。そして、ここでは「饒舌さ」という戦略が選択された。これ以降、この「饒舌さ」という戦略がなにをしようとして選択されたものであるのかを、この著書の独特の言葉づかいから見ていくことをしていこう。

4 「口癖」の思考

「口癖」のようなものを持つ思考の形式というものがある。そして、その「口癖」の如き言葉づかいを整えていくことによって、より深く思考の論理が構成されることもある。たとえば、「社会学の時代」を代表する「スター社会学者」であるだろう宮台真司を見てみよう。佐々木敦は『ニッポンの思想』の中で宮台について以下のように記述している。

対談やトークにおける宮台は……瞬間解答マシンのようなクレヴァーぶりを露骨なまでに誇示します。「それは簡単に説明できます」「それはすべてわかっています」「それは最初から織り込み済みです」などといった意味の台詞が、彼の発言には頻出します。そして、実際、彼は本当に何もかもが瞬時に「わかって」しまうのでしょう。しかし、だからこそ彼は、これからも数限りなく「正解」を答え続けていくと同時に、「正解」の出せない「問い」を、いや、「問い」でさえない「何か」を、永遠に探して求めていくのだと思います。（佐々木 2009:219）

宮台に強く見られるこのような言葉づかいはまさに「社会学の時代」の中での「社会学」に要求されていたもの、「社会学」に内在していた欲望が結晶化しているように思う。「瞬時にわかる」こと、それは思考でもあり、また身振りでもある。「口癖」とは身振りと化した思考であると考えてみたい。

このように「社会学」における「口癖」とは、自覚的な「方法論」という側面も持つものだ。自身の思考スタイルを結晶化したものが「口癖」である。逆に言えば、「方法論」とは「口癖」的なものでもある。たとえば、宮台の「口癖」として、イメージされやすいものに「社会システム論的に言えば」や「あえて」というものがある。乱暴に言ってしまうと、ここで言われる「社会システム論的」とは、「社会」の全域と言及対象の関係の把握という意味であるだろうし、「あえて」とはその「全域」という「文脈」を把握した上での「再帰的」なふるまいを意図する。ここではやはり、俯瞰視点の把握から話がはじめられている。そのような意味では、このような語り口とは、ある種の「社会学」が「全域」を語ることが可能であるという感覚とつながった語り口であり、それは「社会学の時代」というものもっていた感覚を体現したものであるとも言えるだろう。社会学になにができるか？、このような問いに対するこの時代なりの答え方としてこの語り口はある。

同様に、この『平成論』という本の中にも特徴的な言葉づかい、多用される「口癖」の如きものがある。それは「かもしれない」という語尾と、「いかにも『平成的』である」という議論のまとめ方だ。他の部分を見ればわかるようにあきらかに「文体意識」というものを持っているであろう著者は、文章をアンバランス

なものにしかねないかたちでこれらの「口癖」を頻発させている。奇異な印象をもたらすような「口癖」の多様によって本書は構成されている。

笹部建の書評は鈴木という言葉づかいを「反復強迫めいた」、だが、「切実なものが込められているようにも思える」（笹部 2015: 79-80）と書いている。つまり、笹部は鈴木の記事の“奇妙さ”を“コントロールできないもの”（たとえば情熱）の発露の如きものとしてとらえている。これに対して、本評では、この「口癖」の“奇妙さ”を自覚的な「方法論」として読んでみたい。これは「饒舌」という戦略と深く絡んだものであると思われる。

4-1 「かもしれない」症候群

先にも記したように鈴木は「かもしれない」という語尾を多用している。言うまでもないことだが、「かもしれない」とは確定的記述を避けるかたちで用いられる語尾である。安易な確定を避けること、それは“誠実さ”を意味するかもしれないが、一般的に確定的記述を目的地とするような「学問」観のもとでは避けられるべきものとしてあるものだろう。「かもしれない」を可能な限り消去していくことというのが、“通常の”「学問」的作法として存在している。ポパー的に言えば、「反証可能性」を先取りして潰してしまうものとして「かもしれない」という語法は存在している。「かもしれない」によって構成される学問は“間違い”はしない、だが、“正解”を導き出しもしない。

「わかってしまうこと」に対する反撥はこの『「平成」論』という書物の基調を成す感覚だ。だから、可能な限り、それは避けられるべきこととしてあるし、なにかが確定的に語られる場合、それは「とても単純なこと」という言葉と

並べられて語られる。だから、この本の中では確定的記述は“野暮”なものとして扱われ、避けていられる。確定はそこで話を途絶えさせてしまう。鈴木はしばしば、「かもしれない」で終わる文章の次の文章を逆接の接続詞ではじめる。「ただ」、「とはいえ」、「けれども」（すべて鈴木 2014a: 12）。不確定は言葉を連ねるための契機となる。だから、このような不可確定の多用は「饒舌」を構成するための重要な要素となる。そして、「言い訳を重ねる」（鈴木 2014a: 21）ことを厭わないこの書物においては、その「言い訳」を織り込んだ言葉としてこの「かもしれない」は機能することとなる。

だが、やはりそこには疑問が残る。そのような「饒舌」は単なる惰性的なおしゃべりに過ぎないもので、それは「学問」とは異なるものではないか。だが、鈴木はこのような「饒舌」こそを「社会学」であると位置付ける。

問い続ける営みそのものの快樂を楽しむ。ここに本書の意義があり、再帰性、つまり、自らの議論をそれ自身で検証する性格において、本書は社会学だと自らを位置付けている。（鈴木 2014a: 210）

鈴木は「再帰性」という発想を「社会学」の核におき、それを実現するための「文体」として「かもしれない」という「口癖」を選択しているものと推測できる。「言い訳」、それは「再帰的」なものだ。「再帰性」に基づいて継続していく「饒舌」、それが鈴木が「実験」的に行おうとした「社会学的スタイル」としてある。

同じように先に見た宮台的な「あえて」もまた、「再帰性」を織り込んだ語法として存在していることだろう。だが、そこで志向されている方向性はかなり異なる。「あえて」という言

葉が、「文脈」の中における毅然とした自身の立ち位置を指し示す“強い”「再帰的」意味を込めているものだとしたら、それに対して、鈴木「かもしれない」は自身の立ち位置を切り崩していくものとしての「言いよどみや口ごもりやためらい」といった“情けない”意味での「再帰性」が入りこんでいる。どのようなかたちで「再帰性」を自身の「文体」に折り込むのかという意味において、ここには大きな違いが存在している。

『「平成」論』は、「社会学」の持つ「再帰性」という要素を「かもしれない」という語法において採用することによって、これまでと違った方向性を「社会学」の中に呼び込もうとしている。ダラダラと「言い訳」が繰り返されるスタイルは、「社会学」的ダラシなさとも呼びうるものであるかもしれない。「かもしれない」という一見、「無責任」な語法は、たしかに「無責任」なものであるかもしれないが、「学問」的「誠実さ」を担保する方法としてもある。そして、実際、それは「学知」を進行させる機能を本書の中で果たしてもいる。このねじれの如きものを鈴木「かもしれない」という「口癖」は生み出している。

それはやはり「学問」的なものである“かもしれない”。だが、だとしても続いて問われるべきことはやはり存在している。これはあくまでも「方法論」の問題としてあり、「学問」一般の話として使うことができる話でもある。たとえば、“かもしれない”による「哲学」だってありえる“かもしれない”。そのような「再帰性」はどのような「学問」にだって折り込むことはできるし、「日常的語法」の中にだって折り込むことはできる。ならば、本書はいかなる意味で「社会学」でありえるのか。この問いを考えるために次の「口癖」である「いかにも『平

成的』である」という語法について考えてみたい。

4-2 「平成的」という形式と内容

本書の「いかにも『平成的』である」という語法の多用もまた、やはり“奇妙な”感触を与えるものとしてある。ある事象や感覚に名付けを与えることは常識的な学問的手続きに則ったものであり、別になんら不思議なことではない。だが、本書の「平成的」という事象への名付けは、どこかで唐突な感触を持つものであり、マジック・ワード的な感覚を読み手に与えてしまう。それは唐突に現れる「社会システム論によれば」という言葉が、なにかうさん臭いものに思われてしまうことに似てもある。ある種の「概念」が説明抜きに使われること、それは「学問」的手続きに慣れた人間にとっては、むしろ“怪しさ”を感じさせるものでもあるだろう。

「本書では、完全に確定できないにもかかわらず、何となくユーレイのように漂っている、そんな雰囲気を『平成的』と呼」（鈴木 2014a: 50）んでいる。これは「定義」としてはかなりきわどいものである。それはあくまでも「雰囲気」でしかない。この「定義」自体があたかも「ユーレイ」の如きものだ。しかも、これは別に事象の「分析」から抽出されたものであるともいいたい。ここで為されていることはどちらかといえば「平成的」と名付けると宣言に近い。「ユーレイ」の如きものを、「ユーレイ」のような言葉で名付けていく。それはどこかで同語反復じみた行為である。著者はこのような行為を延々と「饒舌」に繰り返していくが、それはなにをしようとしているのだろうか。

そもそも、先ほど見た「かもしれない」という語法自体が「完全に確定できなにもかかわら

ず、何となくユーレイのように漂っている」言葉づかいだ。そして、それにもとづいて、「ベラベラと」言葉が重ねられていく。自身でも何度も繰り返すように、この本の語り口自体がその意味では、この本の「定義」らしきものに従えば「平成的」なものである。その意味で、この本はこの「平成的」という言葉とその定義を含めて、きわめて著者が言うところの「平成的」に構成されている。

「平成的」なものを語ることが「平成的」に為されること、それがこの本の中で行われていることだ。「平成的」という言葉を通じて、語られる「内容」と語り口という「形式」が交わっていくこと、それがこの本の特徴としてある

実際、「社会学」における「概念」の定義とはきわめてやっかいな問題としてある。事象に対して完全に独立した視点から「概念」の厳密な定義を行うことは困難であるし、事象から内在的に「概念」を抽出しようとしたとしてもそこにはやはり理論的視座のような外的な視点が混入することとなる。事象を説明する「概念」を定義する困難は「社会学」という学問の中心的な問題として存在せざるをえない。だから、「社会学」における「概念」の使用の可否は、学問世界の外側にある読み手の納得というものに左右される部分が他の学問よりも強くなる。納得なるものによって「社会」と「社会学」の関係はつながれて、その正否が判定されることになる。このような綱渡りのようなものとして、「社会学」の「概念」なるものは存在している部分がある。

そのような困難に対する1つの応答方法として、本論で行われた分析の語り口という「形式」と分析の「内容」の一致というものもあるだろう。「書き手」もまた「分析対象」としての「社会的意味世界の住人であり、その意味世界に

組み込まれていることになる。つまり、「語り口」というかたちでその「社会的意味世界の「内容」を反映していることになる。自らの「平成的」な語り口を持って、「平成的」なものの存在を語ること、もしその「分析」の読み手がその2つの「平成的」なものの一致に納得することが行われれば、「平成的」世界の中を生きる書き手と読み手の間での共通理解が存在することになり、「平成的」という概念への信頼度は増していく。このような方法を採用ことによって、外挿的な語の「定義」を経由せずに、その成否の判断は、検証可能なものとなる。「平成的」なものを「平成的」に語ることができていると「平成的」な感受性のもとに判断されれば、そこにおける「平成的」という概念の使用はある程度、妥当なものであると考えることができるのだ。

言ってみれば、このような「方法」それ自体が「社会」の「フラット」なるモードに対応したものであるとして存在している。「平成的」な仕方で「平成的」なものを語ること、「フラット」な仕方で「フラット」なるモードを語ること、それが本書が行おうとしていることだ。「書き手もまた、この仕組みに巻き込まれているし、その巻き込まれていることへの自覚こそ、『フラットさ』と何かを『フラット』だと言い表す態度に他ならない」（鈴木2014a: 207）。

「方法論的態度」を徹底化させていくことで、むしろ、そこから「現代社会」の姿をあぶり出すという戦略がここにはある。「方法的態度」にこだわるのがそのまま、「現代社会論」として立ち現れてくること、それがこの書物の目指すところであった。だから、徹底して、「再帰的」であること、自身の「語り」を「語って」いくことがこの書物の中では行われている。その身振りを徹底化させることがこの本の“特異

性”の持つ意味である。そこでは「饒舌」という方法が要請されることになる。「平成的」なものをめぐる語りの「形式」と「内容」の円環の成立が目的地とされ、そのために「饒舌」が繰り返される。「とても単純なことだ」、「かもしれない」、「いかにも『平成的』である」という「口癖」によって構成された「饒舌」はこのような地点を目指して行われている。

5 「いま」と「平成」をめぐるぶれ

この書評では『「平成」論』という書物がどのような「方法論」的意図に基づいて書かれた書物であり、その「方法論」的徹底化がそのまま、「現代社会論」としてのこの書物の分析とつながっていかうとするものであるのかを論じてきた。「語る」ことから「語られる」ものへの円環的な移行、そのような“離れ業”をこの書物は行おうとしていた。ならば、次に問われるべきは、はたして、この“離れ業”が成功したのかどうかという問いである。

大塚英志（2014）は『週刊ポスト』におけるこの本の書評の末尾に以下のようなコメントをはさんでいる。

けれど何かを書こうとする時に、まずポジション探しから入る手続きに、ぼくは何かを回避しているようにも感じる。なぜ、皆ポジショニングをしないと語り始めることができないのか。そこを考えた方がいい。

大塚はこの本に対して「語り」の過剰さを感じ取っている。ニュアンスはやや異なるもの本郷和人（2014）の書評にもこのような側面を読み取ることは可能だろう。「若者らしい生真面目さに溢れた、好感のもてる一冊」とまとめ

られるが、やはり、それはある種の「語り」の過剰さに対する感触を「好感」というかたちでまとめたものであるだろう⁷。

このような評され方に見られるのは、否定的なニュアンスにしる、肯定的なニュアンスにしる、鈴木「語り」が“特異な”ものとして感じられているということだ。ここで確認すべきことは、それが「平成」の“特異さ”とは独立のものとして感じ取られているということだ。「饒舌」の“特異さ”は「平成的」なものでもなく、あくまでも、「著者」である鈴木個人の“特異性”に属するものとして読み取られている。だとすると、「語り」の「形式」と「内容」の円環は成立していないことになるのではないのだろうか。

それは「方法論」の「内容」からの突出という事態におちいってしまっていて、先の円環的移行というこの書の試みが成立していないことを意味することとなる。幾度か繰り返しているように鈴木はこの書を「実験」と語っているし、「考え続ける試み」、「未完のプロジェクト」とも名指している（鈴木2014a: 215）。だが、この「方法論的実験」の要素が強く現れていると読み手にとらえられるということは、「現代社会論」としての着地が適切になされていないことをこの書の場合は意味してしまうことになる。その場合、著者の“特異な”語り口は「著者」に属するものであり「平成」に属するものではない。『「平成」論』という本の試みの成否を考えることはむずかしい問いとして残っている。

実際のところ、このようなかたちで本書の書評を書いているが、この本における鈴木「平成」なるものに対するこだわりの内実はいまだに把握しきれていないところがある。

あとがきで鈴木は「ずっと違和感を覚えてきた。『いま』の世の中にずっと馴染めなかった

し、いまもよくわからない（鈴木 2014a: 235）」と述べている。ここにあるこだわりはよくわかる。それは本書を読んでもわかるし、自分の中にある感覚と共振するものでもある。だから、これまでこの書評を延々と「語る」ということを自分はしてきたつもりだ。自分もまた、「いま」に馴染めないし、「いま」はよくわからない。だから、「社会学」という学問をやってきた。その感覚は「実存的」に本当によく“わかる”。

だが、その「いま」のわからなさや違うかたちで“わからない”のは、本書をこれだけ「饒舌」に語る鈴木の中にある「平成」へのこだわりだ。『『平成』という『いま』』と語られるように（鈴木 2014a: 235）「いま」というものと「平成」はたしかに論理的につながりうるものだ。だが、当然、「戦後」だの「西暦」だの、他のつながりも当然ありえるものだ。鈴木は本書の冒頭で次のようにも述べている。

「平成」という対象と結びつくいくつかのことばを取り上げて、そこにどのような特徴が見られるのかを観察し分析していくというルールを課している（鈴木 2014a: 14）

「いま」への鈴木へのこだわりは共感しつつ、「平成」へのこだわりがいささか“わからない”のはこの部分の「ルールを課す」という言葉遣いにあるような「遊戯性」が気になりもするからだ。

鈴木は「平成的」に「語る」という「ルール」に基づいた「遊戯」の如きものをこの書の中で行っている、そのようにこの書を読むことも可能だろう。そして、この「遊戯性」を「平成的」なものの1つの特質であると考えれば、この「遊戯性」という語りの「形式」それ自体も「平成的」なもので読むことができ、そ

の意味でこの書は「遊戯性」において一貫しており、円環は成立していると言うこともできるだろう。

だが、やはり、この「遊戯性」という解釈をとったとしても、どうしても別の位相の「語り」、たとえば、「いま」を「語らん」とするような「実存的」な語りや本書には混入している気がする。たとえば、本書の最後で唐突に「本書は実は最も『平成的』では『ない』。……『平成的』なものとは対極であろうともがいてきた」（鈴木 2014a: 219）とはしごを外すような言明が差し込まれる。そのこと自体も結局のところ、「やはり……最も『平成的』なのかもしれない」という「平成的」とされる自己言及の輪の中に入りこんで言ってしまうわけだが、この辺りで、むしろ、著者は自身がつくりあげた「平成的」なる言葉の方に呑み込まれていってしまうようにも感じられる。

本書の「饒舌さ」の宛先はぶれているのではないか。「いま」を知りたいという「社会学」的思考を行う動機と、「社会学」的思考によって「平成」を分析しようとする態度がどこか、未分化であるがゆえに、「いま」と「平成」というものが同居して、思考の対象がぶれてしまっている。そして、そのぶれは、自身が提起した「平成」なる問題設定が対象化されないままにテクニカルに処理されてしまっているがゆえに、本来持っていた可能性を削がれたまま放置されてしまっている。これが本書の“わからなさ”の一因であり、大塚の書評の末尾にあるような違和感を形成する原因になっているようにも思える。

この本の中では、「饒舌さ」という態度が、時代反映的なものとしてあるのか、反時代的なものとしてあるのか、それが両方とも語られてしまっているように感じられる。それは、本書

で問われていたものがはたして本当に「平成」であったのかどうか、という謎に関わる問題としてある。この点において、鈴木論述のぶれの意味は問われるべき問題として残るであろう。

6 「平成的な社会学」という問題

前章では『「平成」論』の語りにおけるぶれを指摘し、それが筆者である鈴木「平成」という時代に対する態度のぶれである可能性について考えてみた。だが、最後に考えてみたいことは、この鈴木が見せたぶれは、実際にはいま、「社会学」の“おもしろさ”や“楽しさ”を追求しようとしたときに生じざるを得ないぶれなのではないかということについてだ。「遊戯性」と「切実さ」の間でぶれてしまうということを鈴木の問題として考えてきたが、それはどうも他人事に思えないところがある。むしろ、このようにぶれてしまうことへの共感からこの論考を書こうと思ったこともあった。このぶれは、いまを考えようとする「社会学者」がもってしまう問題なのではないか。

これ以降、『「平成」論』という書物を、“いま、「社会学」をしようとするのがどのようなことなのか”という問いを背負った存在として考えてみたい。この章ではその前提となる「社会学の時代」というものについて問いを掘り下げていく。

本書評においては、繰り返し「社会学の時代」という言葉について考えてきた。だが、正直なところ、その「社会学の時代」なるものを厳密に定義して考えようとしたとき、それがきわめて困難なものであったことを最後に語っておきたい。「スター社会学者」たちの固有名詞を出して考えようとしても、その「社会学者」たち

の仕事は「社会学の時代」なるもので語らんとすることとずれてしまう部分を少なからず持つ、「言説」として文章や雑誌記事などの中から取り出そうとしてもそれらはどこか曖昧模糊とした「言説」としてあり続け、そのような言葉があったらしいという印象以上のものとして姿を現すこともない。ただ、だからといって「社会学の時代」なるもの自体が錯覚であるとするには、やはり、そのような感覚の存在を感じさせられたこれまでの経験は大きなものとしてありすぎる。「社会学の時代」という言説とは、あると言えばあり、ないと言えないような、不思議なものとして語らざるを得ない。そのような意味において、「完全に確定できないにもかかわらず、何となくユーレイのように漂っている」(鈴木 2014a: 50)「社会学の時代」とは、「いかにも『平成的』である」と言うことができるかもしれない。

たしかに本書評で1つの指標として用いた別冊宝島の『わかりたいあなたのための社会学・入門』が平成5年＝1993年に出版されたものであり、また、そこで語られるような「社会学」が平成7年＝1995年のオウム事件を強い契機としてブームになったという史観を採用するのならば、この「社会学の時代」は、「平成」なる時代とほぼ対応関係にあることになる。感覚としても、また、ある事実の見方としても、「社会学の時代」とは「平成的」なものである。だから、これ以降、「社会学の時代」における「社会学」を「平成的な社会学」と呼び、それについて考えていきたい。

「平成的な社会学」の基本的なモードとしてあるものは、先に語ったように「常識を疑う」という態度であるだろう。そして、その“おもしろさ”の最良な部分を言葉にするのならば、「常識」という自明だったものの“わからなさ”

にあらためて気づき、その“わからなさ”の中で考えることでより深いレベルで社会を“わかる”ようになるというような、“わからないこと”と“わかること”の往還運動の中での視点の深まりとでもいうかたちになるだろう。

だが、この“わからないこと”と“わかること”の往還は、「平成的」なものの“軽さ”の中で“わかること”の方に向けて、単純化されていったとも言えよう。ルーティン化した「常識破壊ゲーム」の中で、“疑う”ということはそのラディカルさをすり減らされ、「常識」ははじめから“相対化が可能なもの”というかたちで「自明化」されていくことになる。「常識」は“疑いうる”ものとして“わかりやすく”扱われていき、「歴史」を“調べれば”、その「常識」は「構築」されたものであることがわかる⁸。そのような“わからなさ”の飼い慣らしが「平成的な社会学」の中にあつたという見方もあり得ることだろう⁹。そこでは、“わかること”と“わからないこと”の往還という“おもしろさ”は見失われていくことになる。“あっさりわかる”ことが行われた結果、“疑う”ことの基盤となる“わからなさ”の感覚は希薄で“軽い”ものになってしまう。

「平成的な社会学」というものは“わからないこと”と“わかること”の間のシーソーゲーム、そして、「この“わかることとわからないことのシーソーゲーム”と“あっさりわかること”の間のシーソーゲーム」によって展開されてきたと言えるだろう。“わかること”と“わからないこと”の往還的なシーソーゲームは「学術」的なものだ。そのような“高踏な”ゲームに対して、それをもっと“あっさりとわかりたい”というより広範な「世間」からの好奇心に満ちた視線が向けられるようになる。「学術」と「世間」の間にもまた、シーソーゲーム

は存在している。そこに緊張関係がある限り、これらのシーソーゲームは“おもしろい”ものであるはずだ。この“おもしろさ”の緊張感の中に「社会学の時代」と呼ばれる時期に、「思想」として「社会学」が求められたことの意味もあるだろう。だが、「世間」からの“わかりやすさ”の欲望に答えようとしすぎたとき、もしくは「社会学」が緊張感に絶えきれず安易な“わかりやすさ”に頼りたくなったとき、この魅力的な2つのシーソーゲームは止まってしまう。だとしたら、それはツマラナイことだ。

「平成的な社会学」は「社会学」の“おもしろさ”をより大きく広げたものであるかのように語ることができる。だが、同時にその“おもしろさ”の可能性を押し潰してしまったもののように語れることもできる。その“ユーレイのような”とらえどころのない性質は、この2つの解釈のどちらをも可能にさせてしまう。

7 いま、社会学になにができるのか？

冒頭で論じたようにそのような「平成的な社会学」の影響力は現在ではすでに弱いものとなりつつあるように感じられる。“ユーレイのような”「平成的な社会学」はさらにその実体のなさが顕著になりはじめている。

そのような中でいまだ「社会学」に外部から強く求められているジャンルがあるとすれば、これもまた冒頭で例として示したように「若者語り」と「当事者研究」というものがあるだろう。「若者語り」もまた、“若さ”という「当事者性」に寄り添ったものであるから、そこでキーワードは「当事者性」と言えるかもしれない。“若さ”や“障害”といったある特定の「局域」に立ちながら、そのような場所にあるからこそ見える「社会全体」の気付かれていなかった

た姿を描き出すことができるこれらの研究スタイルは、「平成的な社会学」に求められていた“常識破壊のおもしろさ”を新しいかたちで提供してくれるものとしてある。ある「局域」のリアリティに深く根付いた“実直な”これらの方法は、「平成的な社会学」が持っていた「過剰説明」の危うさについても、相対的にそこから免れたものとしてあることだろう。エビデンスがより重要視される状況下で「社会学」の“おもしろさ”を展開する方向性の1つとして、このような方法はありえるだろうし、そこから提示される新たな「リアリティ」は「思想」や「哲学」、「批評」にも応用可能なはずだ。このように「平成的な社会学」の、ある1つの生き延び方として「若者論」や「当事者研究」はあると言えるだろう。

だが、同時に、そこには“わかりやすさ”の罠もあるように思う。「当事者」というある特定の「局域」は“わかりやすく”固定されたものとしてあり、1つの立ち位置からの限定された視点として理解されてしまう。言ってみれば、それは「キャラ」というかたちで理解され、社会的に消費されてしまうあやうさを持つ¹⁰。もし、そのような立ち位置“のみに”「平成的な社会学」の居場所が求められているのだとすれば、その“おもしろさ”は、やはり「社会学」の“おもしろさ”とは違うものだ。“わかりたい”という欲望に素朴に答え“わかったつもり”に人をさせてしまうこと、それはもっとも避けられるべきこととしてある。

だからこそ、「社会学」の“おもしろさ”を今一度、考えなおすということは、“わかること”に寄ってしまいがちな現状のシーソーゲームに対して、“わかること”と“わからないこと”の間の往還を取り戻すことにある。そのような状況認識の中で、『「平成」論』という書物

は、複雑骨折をも恐れないような“奇妙な”「饒舌」を持って、「どこまで考えても『わからない』がゆえの堂々巡りの快樂」（鈴木 2014a: 13）をこそよみがえらせようとしたと言えるだろう。“わからないこと”がいまこそ、大切な意味を持つという状況判断のもとに。それは「平成的な社会学」に対する批判的介入としてある。

8 「平成的な社会学」の不安と快樂

ここまで、「平成的な社会学」について考え、それとの関連の中で鈴木「饒舌さ」という方法の意味を、自分なりの仕方でもとらえようとしてきた。そして、このように議論をまとめてみたとき、ふと自分自身の「平成的な社会学」に対する態度がぶれてしまっていることを自覚せざるを得なくなる。「平成的な社会学」は新たな可能性を自分に与えてくれたものであるように見えてくることもあれば、批判し脱却すべき軀のごとく見えてくることもある。そもそも、「ソシオロギス」の「書評論文」という形式の中で、「学術論文」との“微妙な”関係を維持したままに論考を進めるといふこの書評のスタイル自体が、まさに「平成的な社会学」によって切りひらかれたものに寄り添って成立しているところがある。だが、同時にそのことによる「不安」もこの文章の中には入りこんでいる。

「平成」に「社会学」をはじめた自分にとって、「平成的な社会学」との関係という問題はとても複雑な問題としてある。だから、その“おもしろさ”もその“あやうさ”もどちらもがとてもよくわかるものとしてある。だからこそ、「平成的な社会学」は受け継ぐべきものであるのか、離れるべきであるのかも、よくわからない。いや、そもそも、「平成的な社会学」とい

うもの自体が先ほど論じたように、それをとらえようとしたときによくわからないものとして姿を現すことになってしまう。「平成的な社会学」について考えはじめた瞬間に、「平成」を考えていた鈴木と同じような感覚が自分の中に生じてきている。「平成的な社会学」に対して、自分の態度はぶれてしまう。

このように考えると、鈴木の「平成」に関する「社会学」的な議論が「遊戯性」と「切実さ」の2方向に分岐してしまったことの意味も見えてくる。もし「平成的な社会学」の中に、これまでの「制度」的な「社会学」を踏み越えることによって成し遂げたことがあったとすれば、それは、これまで見向きもされてこなかったような文化的な対象を“軽やかに”語るようになったことであり、また、通常科学の枠組ではナイーブ過ぎて扱いきれなかったような「実存的」な問いをより直接的に問えるようになったことであるだろう。「制度」を踏み越え、“乱暴に”議論を展開できることは、そのような可能性を生んでくれる。そして、その最良の部分においては「遊戯性」と「切実さ」はゆるやかに重なり合っていたらうし、そのような「浅さ」と「深さ」の重なり合いこそが「平成的な社会学」の可能性であったと言えよう。「文化」が大きな意味を持つ時代では、サブカルチャー的“軽さ”が「実存的」な“重さ”と直結しうる。

だが、『『平成』における批評』が『『深さ』や『浅さ』もな』（鈴木 2014a: 209）いものとなっていくように、「平成的な社会学」においても、その可能性は「社会学の時代」などとあっさり言ってしまうような安易さの中で摩耗していき、“軽さ”と“重さ”のどちらの“おもしろさ”もが拾いがたいものとなってきてしまっている。だから、いま、「社会学」の“おもしろさ”を考えようとするのは、まさに「遊

戯性」と「切実さ」のブレの中に身を置くことであるのだ。“真剣さ”と“軽快さ”の中で考えていかざるを得ない。そして、その2つを組み合わせていくことで、新たな“おもしろさ”を展開していかなければならない。鈴木はこの“真剣さ”と“軽快さ”を、「身悶え」と「快楽」に満ちた「饒舌」とすることで、展開しようとしたのであろう。

このようにこの書評が“長くなってしまった”ことにもあらわれているように、わたしもまた自分を「饒舌」というスタイルへの愛着を共有する者であると考えているし、「自明性を疑う」というフレーズにどこか一元化され“わかりやすく”なりすぎてしまった「社会学」に対して、「饒舌さ」をもって、「社会学」の多様な“おもしろさ”を再発見していきたいと考えている。「饒舌」の「快楽」も「苦悶」もよくわかる。

鈴木は『『平成』論』の中で“わかりやすい”という方向に寄りすぎてしまった「平成的な社会学」のシーソーに対して、“わからなさ”というものを語ることによって、そのシーソーのバランスを取り戻そうとしている。それは読手の期待を裏切り続けるようなかたちで“わからなさ”を提示し続ける「饒舌さ」をもって行われる。

だが、わたし自身は、先ほど述べたように、「“わからないこと”と“わかること”の間のシーソーゲーム」とともに、「“わかることとわからないことのシーソーゲーム”と“あっさりわかること”の間のシーソーゲーム」というものが「社会学」の“おもしろさ”に関わっていると考えている。そして、この2つのシーソーゲームの運動をともに取り戻すことが大事なのであり、“あっさりわかること”の対立項

として“わからないこと”を置くだけでは、まだ不足があると考えている。だから、いまと違うかたちで“わかる”ということもまた、大事なファクターとして存在していると考え。その意味で、わたしは、むしろ、違った“わかり方”に向けて「饒舌」を組み立てていきたいと考えているが、それがどのようなことかは、いまはまだ“わかっていない”。だから、とりあえず、自分なりにこのようにベラベラと「饒舌」を自分が“おもしろい”と思うことの方角に向けて展開していきたい。

“わからなさ”が“わからなさ”として提示されたとき、それは“わからなくてよいもの”という“わかりやすさ”として理解されたり、もしくは理解しなくてよいものであると扱われたりしてしまう危うさがある。それは『「平成」論』がはらんでいたぶれが、“わからなさ”の中で可視化されにくいかたちで存在していたことも重なる問題でもあると思う。“わからなさ”という感覚それ自体は、実は、掘り下げようとせず放置してしまえるものであるならば、きわめて“わかりやすい”。

実際、『「平成」論』という書物はそのようなかたちでスルーされてしまっている局面が多いと思う。それに対して、本書評で書きたかったことは、鈴木の饒舌さがその“めんどくささ”にもかかわらず、付き合うべき種類のものであり、そんな簡単に処理できるような“わからなさ”によって構成されているわけではない、ということだ。その「饒舌さ」に深く共感するし、その“わからなさ”の魅力にひきこまれもした。『「平成」論』の「饒舌さ」を通じて、これだけ「饒舌」になることができたことにそれはあらわれていると思う。

「社会学」の“おもしろさ”、それは未完のプロジェクトとして存在するものであり、さま

ざまな「実験」によって切りひらかれていくべきものとしてあることだろう。「社会学」の“おもしろさ”を「語る」ことの中で探ること、そのような試みの中で、この著者の論考と今後も仲良くケンカしていくことができたらしあわせであると思う。

注

¹ 晩聲社という出版社の書籍の奥付は1987年以来、「核時代」という表記になっている。天皇に由来する「元号」も、キリスト教に由来する「西暦」も拒否しながら、核兵器の使用を人類史における一大転機と見る視点からこの「私年号」は採用されているが、それは当然、「戦後」と数字において一致する。「戦後70年」は「核時代70年」である。ここに見られるようないわゆる「左派」的“生真面目さ”に対して尊敬と揶揄の双方が入り混じった複雑な感情を持ってきたが、こう考えてみると、この「私年号」それ自体は“正しい”ものであったのかもしれないともいまは考えてしまう。

² <http://school.genron.co.jp/critics-papers/theme-2015/%E3%83%9D%E3%82%B9%E3%83%88%E6%98%AD%E5%92%8C%E3%81%AF%E3%81%A9%E3%81%93%E3%81%AB%E3%81%82%E3%82%8B%E3%81%AE%E3%81%8B>

³ この冒頭の「単純なこと」という言明は「批評」の章においては登場していない。この書と「批評」なるもののいささか複雑な関係性がここにあらわれているようにも思う。このことは、冒頭に記した「批評」と「社会学」の間の微妙な関係を反映したものではないだろうか。

⁴ ちなみに、「饒舌の社会学」という問題系について、わたしが主な研究対象としているT・W・アドルノをその先駆者としてイメージしているところもある。あるテーゼの周りを、繰り返しても、微差を伴った変奏ともいえるようなかたちで延々と繰

り返すアドルノの叙述スタイルもまた「饒舌」なものであると言えるだろう。また、『啓蒙の弁証法』内の、オデュッセウスとサイクロプスの部分の結末に関する考察は、機知と饒舌をめぐる議論として読むこともできるだろう (Horkheimer, Adorno [1947]1988: 75=2007: 141)。

⁵ 後述するが「社会学の時代」とはなにか、ということに厳密に語ろうとすることはきわめてむずかしい。鈴木 (2014b) の註 4 や註 12 は、この感覚をつかみとろうとしたものであるだろう。

⁶ ただし、わたし自身の立場を言えば、どちらかといえば、このような「社会」概念の「逆ギレ」的な使用の可能性を論じることに興味があるかもしれない。

⁷ 「社会学の時代」がある程度収束しつつあるかに感じられる近年、「社会学者」に求められる「社会」の要望として、「若者」による彼らの「リアル」の伝達係というものがあるように感じられる。なぜか、近年、「社会学者」は「若さ」と結びつくようになっていく。

⁸ 野上元は論考「社会学が歴史と向き合うために」の中で、『〇〇とは何か』『〇〇の誕生』といったタイトルや問題意識のもとにある研究 (野上 2015: 11) に関して考察を行っているが、「平成的な社会学」の展開とこれらの研究の間の関係は考えられるべき問いとして存在しているだろう。

⁹ このような言い方は俗流「構築主義批判」的物言いであり、自分自身もそこに乗ってきたという自覚があるが、同時に、そこで言われる安易な私たちでの「構築主義」がどこでどのようにあったのかと考えると、批判対象 (もしくは揶揄の対象) としての「構築主義」なるものに対する見方もまた、「平成的」に生み出されたものであるかもしれない。

¹⁰ この「キャラ性」という問題は、“若き”「社会学者」たちに社会的に要請される役割が「コメンテーター」的なものになりやすいということと絡んでいくことだろう。もしくは、インターネットや SNS という「キャラ性」が強く出やすい空間について、この問題と絡めて考えられるかもしれない。

文献

遠藤知巳, 2010, 『フラット・カルチャー』せりか書房。

本郷和人, 2014, 『「平成」論』書評『朝日新聞』2014年7月6日号。

Horkheimer, M, Adorno, T. W. 1988, *Dialektik der Aufklärung*, Fischer Taschenbuch Verlag. (=2007, 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店)

見田宗介, 2006, 『社会学入門』岩波書店。

野上元, 2015, 「社会学が歴史と向き合うために」野上元・小林多寿子編『歴史と向き合う社会学』ミネルヴァ書房, 1-21。

大澤真幸, 1996, 『虚構の時代の果てに』筑摩書房。

大塚英志, 2014, 『「平成」論』書評『週刊ポスト』2014年7月14日号。

笹部建, 2015, 「時代診断の疑似否定」『KG 社会学批評』(4):79-81。

佐々木敦, 2009, 『ニッポンの思想』講談社。

佐藤俊樹, 2010, 「社会学／「社会学」背中あわせの共依存あるいは「殻のなかの幽霊」」遠藤知巳編『フラット・カルチャー 現代日本の社会学』せりか書房, 393-400。

鈴木洋仁, 2014a, 『「平成」論』 青弓社.

鈴木洋仁, 2014b, 「そのテキストの読者は誰か? ——書評『社会学ワンダーランド』」『書評ソシオロギス』
(10):1-17.

(かたかみ へいじろう、立教大学兼任講師、hglo2hglo@ybb.ne.jp)

(査読者 若林幹夫、鳥越信吾)